

第  
66  
回

おおさかたきぎのう

# 大阪新能

# 能楽堂公演

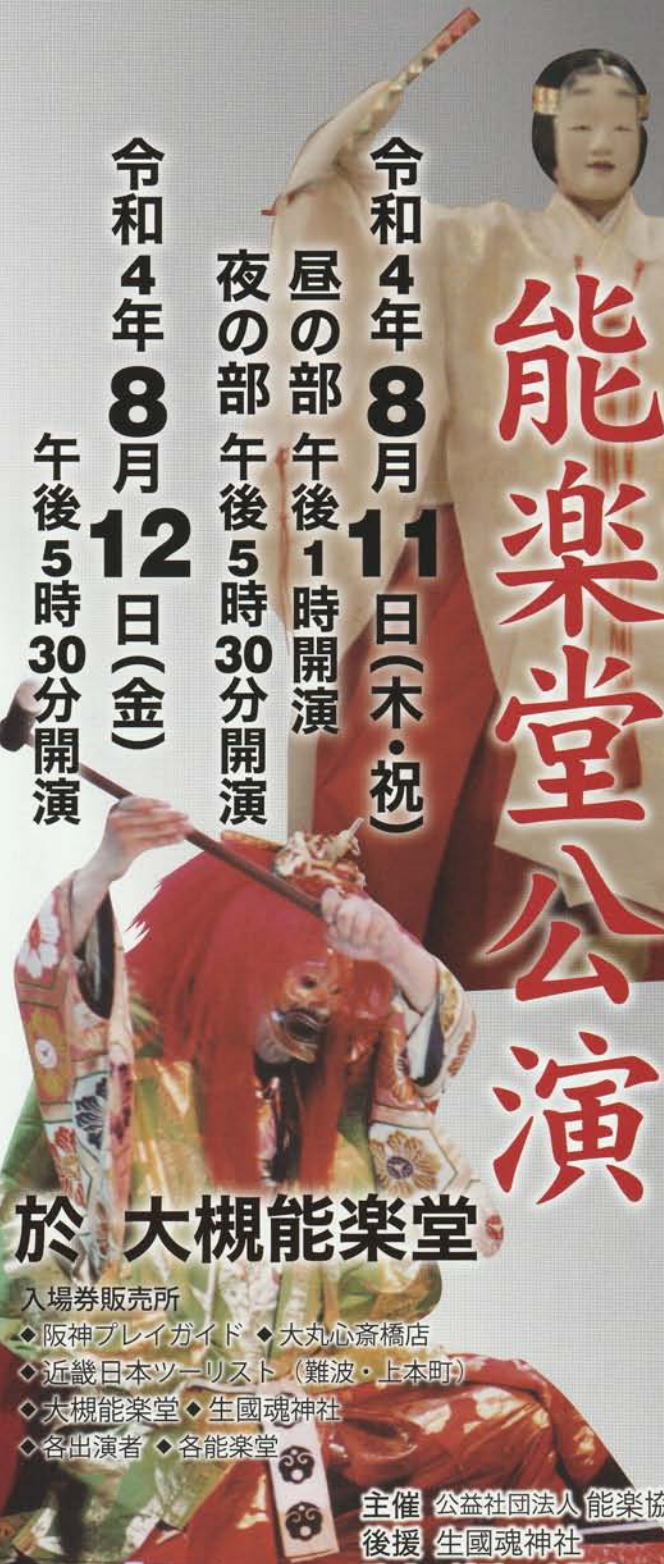
令和4年8月11日(木・祝)

昼の部 午後1時開演

夜の部 午後5時30分開演

令和4年8月12日(金)

午後5時30分開演



入場料

前売券	3,500円	(各一回有効)
当日券	4,000円	(各一回有効)
学生券	2,000円	(当日のみ)

於 大槻能楽堂

- 入場券販売所
- ◆ 阪神プレイガイド ◆ 大丸心齋橋店
  - ◆ 近畿日本ツーリスト (難波・上本町)
  - ◆ 大槻能楽堂 ◆ 生國魂神社
  - ◆ 各出演者 ◆ 各能楽堂

主催 公益社団法人能楽協会 大阪支部・大阪新能委員会  
 後援 生國魂神社  
 助成・補助 大阪市・公益財団法人 東教育財団



第六十六回大阪新能 能楽堂公演 第一日 昼の部

令和四年八月十一日(木・祝) 午後一時開演(開場正午)

能楽を

より楽しく御覧頂くために

能楽水先案内人

井戸良祐  
小西玲央

半能(金春流) Naniwa

木華開耶姫湯本哲明

王仁金春穂高 從者 中村宜成

難波

朝臣 福王 知登

大鼓 辻 雅之 太鼓 中田弘美  
小鼓 上田敦史 笛 赤井要佑

後見 金春飛翔 金春嘉織

地謡 中田能光 佐藤俊之  
酒井賢一 金春康之  
田中直樹 吉川恵有

狂言(大蔵流) Neongyoku

寝音曲

太郎冠者 善竹彌五郎 主人 上西良介

後見 上吉川徹

休憩

挨拶

大阪市長 松井一郎

能 (観世流) Hajitomi

半部

夕顔の霊女 上野雄三

僧 福王茂十郎

大鼓 守家由訓 小鼓 清水皓祐 笛 貞光智宣

間 京の男 善竹隆平

後見 齊藤信輔 赤松禎友

地謡 山本麗晃 井戸良祐  
上野朝彦 山本博通  
今村哲朗 上野朝義  
山中雅志 寺澤幸祐

附祝言

終了予定 午後四時頃

第六十六回大阪新能 能楽堂公演 第一日 夜の部

令和四年八月十一日(木・祝) 午後五時半開演(開場四時半)

能楽を

より楽しく御覧頂くために

能楽水先案内人

井戸良祐  
小西玲央

能 (観世流) Yoroboshi

俊徳丸 梅若堯之

弱法師

高安通俊 中村宜成

大鼓 山本寿弥 小鼓 成田達志 笛 貞光訓義

間 下人 善竹彌五郎

後見 梅若基徳 生一知哉

地謡 永田克壬 井戸良祐  
金子 昭 井戸和男  
上野朝彦 梅若猶義  
山中雅志 長山耕三

休憩

挨拶

新能委員長 梅本憲史

西王母

仕舞(宝生流) Seiobo

石黒実都

地謡 渡邊珪助  
辰巳孝弥  
辰巳二郎

仕舞(観世流) Kantan

畑 宏隆

邯鄲

能 (観世流) Kurumazo

地謡 井戸良祐  
梅若基徳  
生一知哉  
水田雄昭

山伏 山田 薫

車僧

車僧 喜多雅人

大鼓 上野義雄 太鼓 上田慎也  
小鼓 久田陽春子 笛 斎藤 敦

間 溝越天狗 善竹隆司

後見 武富康之 大槻文藏

地謡 鶴 克彦 斎藤信輔  
上野雄介 大西礼久  
林本 大 齊藤信隆  
水田雄昭 山本正人

附祝言

終了予定 午後八時十五分頃



第六十六回大阪新能 能楽堂公演 第二日(一回公演)

令和四年八月十二日(金) 午後五時半開演(開場四時半)

能楽を

より楽しく御覧頂くために

能楽水先案内人

井戸良祐  
小西玲央

杜若ノ精長山耕三

能(観世流)

Kakitsubata

杜若

恋之舞

旅僧 福王知登

大鼓 森山泰幸 太鼓 上田 悟  
小鼓 荒木建作 笛 赤井啓三

後見 山本博通  
松浦信一郎

地謡

伊原 昇 勝部延和  
上野雄介 波多野晋  
山田 薫 山本章弘  
水田雄昭 小西弘通

狂言(大蔵流) Uozekkyo

魚説経

休憩

出家 善竹隆平 男 小西玲央  
後見 上吉川徹

挨拶

(公社)能楽協会大阪支部支部長 成田達志

仕舞(喜多流) Shunzei tadanori

俊成忠度

高林呻二

地謡 高林白牛三  
高林昌司

仕舞(観世流) Tobosaku

東方朔

赤井きよ子  
塩谷 恵

地謡 宮下昌子  
前田和子  
立花香寿子  
前田飛南子  
山下あきの

能(金剛流) Kokaji

小鍛冶

童子 山口尚志  
稲荷明神

三條宗近 広谷和夫

大鼓 山本哲也 太鼓 中田一葉  
小鼓 成田 奏 笛 野口 亮

間 勅使 喜多雅人  
下人 善竹隆司

後見 豊嶋幸洋  
重本昌也

地謡

山口冬吾 谷口雅彦  
北川米喜 中嶋謙昌  
藤田章三 田中敏文  
大菅義信

附祝言

終了予定 午後八時半頃

第一日(昼の部)

「難波」(なにわ)

古代、仁徳帝を称えた有名な歌「難波津に咲くや此の花冬籠り今は春べと咲くや此の花」を題材にした能、後半はこの歌を詠んだ王仁の霊と梅の精である木華咲耶姫が数々の舞楽を奏し舞を舞います。

「寝音曲」(ねおんぎょく)

主人はたまたま酒に酔っている時に通りかかった太郎冠者の謡が気に入る何とまた歌わせようとしますが度々歌わせられては堪らないと思つた太郎冠者はあれこれ策を練るのですが。

「半部」(はじとみ)

夢幻能の代表作の一つ、立花供養を行つてる僧の前に一本の花を供えに現れた女が自分は五条あたりに住む者だと言ひ残し花の陰に消える、やがて僧が訪ねるとそこには半部に夕顔が寂しく咲く庵があり半部を上げて夕顔の霊が現れ光源氏との恋の思い出を語り舞を舞いやがてまた半部の中に消えて行くのであつた。

第一日(夜の部)

「弱法師」(よろぼし)

他人の讒言を信じ心ならずも実子の俊徳丸を家から追い出してしまつた高安通俊、やがて春の四天王寺で弱法師と呼ばれる盲目の乞食に出会う。その人こそ我が子俊徳丸であつた。やがて日想観法要で難波の情景を浮かべる俊徳丸であつたが狂乱の後父に手を取られ高安の里に帰るのであつた。

「車僧」(くるまぞう)

自らの法力で牛の引かない車を自在に操る車僧と呼ばれる僧(ワキ)の前に山伏の姿で現れる天狗が現れ問答を挑みます。動じない車僧に今度は真の天狗の姿で現れ雪道での力比べを挑みますがついに恐れ慄き去つて行きます。

第二日

「杜若」(かきつばた)

三河の国八橋、諸国行脚の僧の前に一人の女が現れここは杜若の名所であると教え自分の庵に案内します、やがて女は唐衣に透額(すきびたい)の姿で現れ自分は杜若の精である事を明かし伊勢物語に記された在原業平の恋の歌を引きながら幻想で艶やかな舞を舞います。

「魚説経」(うおせつきょう)

まだお経を習つてない漁師あがりの修業中の僧がお布施欲しさに一計を案じて魚類の名前をお経に盛り込んでしまふのですが、さてどうなる事やら。

「小鍛冶」(こかじ)

帝の名を受け刀を打つように命じられた名匠三条小鍛冶宗近は相槌の相手がいない事に悩み稲荷明神に助けを求めます、やがて少年が現れ合槌を約束するのですが実はその少年は稲荷明神の化身であり宗近は無事刀を打つ事が出来たのであつた。

新型コロナウイルス感染防止対策にご協力ください。

- ・マスクのご着用をお願いいたします。
- ・客席、ロビー等での会話はお控えください。
- ・発熱などの症状がある場合は来館をお控えください。



お願い

- ・上演中は携帯電話、スマートフォンの電源をお切りください。
- ・館内での飲食はご遠慮ください。
- ・都合により能の一部を短縮することもあります、ご了承ください。
- ・当公演は、指定写真班を設けております。事前に許可のない方の録音及び写真・ビデオ撮影は固くお断りいたします。